視　点

障がいのある子どもの立場に立った理解と支援を考える

～子育て・子育て支援に携わる人のために～

社会福祉法人水仙福祉会

姫島こども園　園長

岩崎　隆彦

発行　２０１５年１０月
社会福祉法人水仙福祉会　アイ・サポート研究所

はじめに

子育て・保育・療育といった支援の現場において、子どもたちはいろいろな姿を私たちに見せてくれます。直接子どもとかかわり、保護者の方々のお話を伺い、ご家族と出会うなかで、私たちは実に多くの「発見」をします。

実践の場は本当に貴重です。調査や研究では知ることのできないことがいっぱいあります。この冊子では、実践の積み重ねから得た知識や、子育てや子育て支援に大切だと思われるテーマを取り上げて、子どもたちの行動の背景にある意味や本人の思いを理解する方法、ご家族の抱える悩みや困難に対する理解と実際の支援に繋がる手立てを一緒に考えたいと思います。

この「視点」は、もともとは園だよりのコラムに、保護者の方々に向けて１ヶ月１回のペースで書き溜めたものです。全体の構成は、内容によって、第１部（本人を理解する基本的視点：発達・障がいをどう捉えるか）、第２部（気持ちの通じ合う人間関係を築く：一人ひとりの子どもを見る）、第３部（家族を支える）に分けていますが、互いに深く関連しているので、どこから読んでいただいてもよいと思います。

本冊子で書かれていることは、私個人の経験だけでなく、共に子どもやご家族の支援をしてきた多くの職員、そしてこれまで出会った多くの子どもたちやご家族から学んだものです。

本冊子が皆様の子どもの理解や支援に役立ち、一人ひとりの子どものすこやかな成長につながれば、それほどうれしいことはありません。

2015（平成 27）年 10 月

社会福祉法人 水仙福祉会
姫島こども園　岩崎隆彦
（アイ・サポート研究所）

目次

◆第１部　本人を理解する基本的視点

≪発達・障がいをどう捉えるか≫

１．　一人ひとりのすこやかな成長を願って

２．　視点を通して伝えたいこと

３．　子どもの心に目を向ける

４．　野性的自立でなく社会的自立を

５．　子育て・支援の軸がぶれないように

６．　行動障がいは作られる

７．　攻撃行動と自傷

８．　見直したい言葉づかい・表現

９．　子どもは大人の態度を見ています

10．心の支えとなる人間関係を築く

11．情緒は人・物の認知を左右します

12．「理解」と「納得」、どちらも大切です

13．意思表現が育つ過程と必要な配慮

14．子どものSOSを見落とさないで！

15．人間関係とコミュニケーション力の育ち

16．安心して新しい環境になじむために

17．はじめての集団生活へ～親子が安心できる配慮

18．集団の中で友だち関係が育つ配慮

◆第２部　気持ちの通じあう人間関係を築く

≪一人ひとりの子どもを見る≫

19．子どもに接するときの基本的心構え

20．言葉を育てる ～子どもの心に響く言葉かけを

21．手をつなぐ ～多動と言われる子への支援

22．ひとり行動が多く、要求が少ない子

～自発的な要求表現を育てる

23．急に泣き出す、ぐずる、怒る

～その行動には「わけ」があります

24．転んでも泣かない子 ～自然な感情表現をはぐくむ

25．人見知りの強い子

26．抱っこが難しいとき

27．小食・偏食傾向のある子

～食事とコミュニケーションの密接な関係

28．高い所に登る、ウロウロする子

～ストレートな表現への支援

29．再点検！ 癇(かん)が強い子どもへのかかわり方

30．回る物にこだわる子 ～自閉症だから？（その１）

31．特定の歌にこだわる子～自閉症だから？（その２）

32．場面に関係のない言葉をしゃべる子

33．同じ質問を何度も繰り返す

～分かっていないのは、どっち？

34．心と心のつながり ～国・言葉の壁を越えて

35．大人を困らせる行動をする子 ～行動の意味と支援

36．ほめられても、しんどい！

～ストレスを引き起こす、熱心な指導・かかわり

37．押す・叩く・噛みつく子への支援

◆第３部　家族を支える

38．何のための診断？判定？

39．相談の勧め～母親にも心の支えが必要です！

40．子どもが育つ基盤は日常生活に

～親が安心感とゆとりを持てるように

41．きょうだい（兄・姉）の思いを知る

42．弟・妹ができたとき ～障がいのある子への配慮

43．ピンチをチャンスに ～個別相談の勧め

44．問題解決を一緒に考えましょう

～グループ相談を通して

45．家庭の育児力を高めましょう

46．子育てを応援する祖父母へ

47．子どもの心を発見する ～子育ての喜び

48．新たな一歩を支える ～支援者と保護者の役割

1．一人ひとりのすこやかな成長を願って

乳幼児期、学齢期は、子どもは家庭を基盤に生活しています。子どもの成長を支えるには、子育てをしている親御さんの抱える悩みや困難が軽減し、気持ちの通じ合う親子関係や家族関係が築かれることが大切だと思われます。そうしたことから、私たちは、子どもの療育だけでなく、家族支援も大切な柱と考えて日々の支援を行なっています。

＊

私たちが発達相談の場で親御さんに最初に出会うのは、お子さんが１歳、２歳、３歳の頃です。この時期、親御さんの多くは「うちの子はどこまで分かっているのだろうか」「意思はあるのだろうか」「かんしゃくはおさまるだろうか」「言葉は出てくるだろうか」「友だちと仲よく遊べるようになるだろうか」など、大きな不安や心配を抱えておられます。私たちは、「子どもの成長を共に支える」という基本理念のもと、親御さんの不安や悩みをお聞きし、お子さんの行動の背景にある心に焦点を当てて、日々のかかわり・支援を積み重ねていきます。そうすると、お子さんの前向きな成長とともに、親御さんも落ち着かれて、「いろいろあるけど、わが子と気持ちが通じあえるようになってうれしい」「一緒にいることが苦にならなくなった」「やりとりが楽しくなってきた」と手応えを話されるようになります。私たちにとってそれは何よりの喜びです。

人間には「より良く生きたい！」という基本的欲求があります。理解してもらえる人のいる環境・楽しい環境に置かれると、どのお子さんもそれぞれのペースで着実に成長していきます。それは表情や目の輝き、遊びや活動の姿、そしてご家族や職員との人間関係の変化で確かめることができます。たとえば、喜怒哀楽がはっきりして、柔らかな表情や笑顔が増えます。身近な大人と一緒にいることを喜ぶようになってきます。甘える、要求を伝える、意思を表現する、自己主張をするなど、人と共に生きていく上でとても大切な『自分（私）』が形成されてきます。このような心の発達が導かれるのは、けっして厳しい指導や繰り返しの訓練によってではなく、親御さんをはじめ職員など周りの大人が協力しながら、本人の意思や思いを理解しようと努め、こまやかな気持ちのやりとりを日々積み重ねてきた結果です。私たちは、そのことをしっかり心に留めておきたいと思います。

また悩みを一杯抱えておられた親御さん自身も、親子通園や家族行事を通して互いに親しみ、経験を交換し、知恵を合わせて育児に関する様々な問題を一緒に考えることを通して、少しずつ落ち着いてこられます。そこから生まれた安心感・連帯感や心のゆとりもお子さんの成長を支える基盤となっているのだと思います。

＊

お子さんのすこやかな成長には、本人を信頼し意思を尊重してくれる人、困ったときに支えてくれる人、共に喜び、共に悲しみ、経験を共有してくれる人の存在が欠かせません。そのような人間関係を基盤に、子どもは人への信頼、自信や自尊感情（自分を大切に思う気持ち）を育み、生きる力を身につけていきます。成長していく過程では、多くの困難に直面するかもしれませんが、「心の支え」があれば大丈夫です。私たちは、子どもたち一人ひとりが培ってきた人への信頼と自信をさらに深め、新たな環境においても、人との楽しい出会いやワクワクした経験ができることを心から願っています。

2. 視点を通して伝えたいこと

今回は『視点』を通してお伝えしたいことを、３点に絞って書きます。

＊

①子どもの心に焦点を当てる

発達で気がかりなことがあると、私たちは、つい子どもの「できないこと」に目が行き、現状を少しでも良い方向に導きたいとの願いから、特別の指導や訓練が必要と考え、子どもの行動を外からコントロールしようとしてしまいます。

しかし、子どもには意思があります。こちらが「あなたのために」と思って行動修正を求めても、本人にとっては苦痛で不本意な場合が多々あります。また、本人が精一杯の主張をしていても、表現が上手でないために、大人から頭ごなしに叱られたり、制止されたりする場合も稀ではありません。まだ意思や気持ちをうまく表現できない子にとっては、周りの人に自分のことをちゃんと理解してもらうのは並大抵のことではありません。ですから、直接かかわる人には、「その子がなぜそのような行動を取るのか、何を考えているのか、困っているか、私たちの働きかけをどう受け止めているか」を捉える『視点』が大切になるのです。

②成長の糧となる喜びを共有する

子どもは大人からの一方向の働きかけだけで育つ受身の存在ではありません。自らの意思を持ち行動し学ぼうとする主体的な存在です。身近な大人に、「ああ、これが言いたかったの！」「こうしていたのは訳があったんだ！」と行動の背景に隠れていた（表現できなかった）意図や気持ちに気づいてもらうと、そこから得られる安心感・喜びを糧にして、人への信頼感がはぐくまれ、自尊感情（自分を大切に思う気持ち）が育ちます。本人の立場に立って理解する『視点』の共有は、確実に子どものすこやかな成長に繋がります。

③新たな発見を可能にする

子どもにとって周りの人に「理解してもらえた」という喜びを体験する機会は、家庭や園・学校、地域の日常生活の中に一杯あります。大人から見て「厄介」「些細なこと」と見える行動も、子どもの立場に立つと、その子なりの精一杯の訴えと捉えられる場合がよくあります。元来子どもが自分にとって大切な人を困らせようと意図するはずはありません。むしろ理解してくれる人を必死で探しています。大人が「ああ、そうだったの！」と合点が行くことが増えれば、必ず子どもの側も「この人は分かってくれる！」という実感を持つようになります。それは両者が互いの心を発見・確認する機会が増えることを意味し、気持ちの通じ合う関係が確実に築かれる方向に進んでいることを示唆しています。

＊

以上のような趣旨のもと、『視点』を通して、皆さんと一緒に生活の中で発見したエピソードを交えながら、子どもの理解と支援について考えていきたいと思います。